ラブカクテル

その2

風 雷人

その2

いらっしゃいませ。
どうぞこちらへ。
本日はいかがなさいますか？
甘い香りのバイオレットフィズ？
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。
少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は手相占いでございます。

ごゆっくりどうぞ。

私はついていないそうだ。
そう。
気晴らしにたまに入る手相の占い師の元で必ずそう言われるのである。
オレはいつもそれに頭にきて、占い師を詐欺よばわりして帰るのだが、なぜかまたふと気になっては、別の手相占い師のところへ行ってはみるのだが、いつも答えは似たり寄ったりのツキの悪さ。
確かにオレの人生ツイているかといえば、なんとも言えないとこだ。
胸を張ってツイてるとは言えないまでも、そんなに悪い人生じゃない。
と思う。
五体満足な体に、親だって両親健在。
ありがたい、ありがたい。
学歴だって高卒で、成績は中の上。
いや、下かな。
でもこの不景気にちゃんとした就職だってしているし、食事だって毎日三食。
少ないがお金だって貯金があるし、一応恋人もいる。
まあ、平凡ではあるが、ツキのない人生ではないと思う。

よし。

今夜もちょっと手相を見てもらうか。
オレは彼女との待ち合わせより、かなり早い時間でそこに着きそうなのを確認すると、外でしばらくボーっと待つくらいならと、たまたまあった二、三人の並んでいる通りがかりの手相の占い師の列に並んだ。
意外と列はスムーズに進み、オレの番に。
占い師は初老の女性。
茶色の頭巾を被り、小さな机には水晶と虫眼鏡、それと古ぼけた本が、まさにお約束と言わんばかりに置いてある。
オレは、手相を見て欲しいと頼み、手を差し出した。
するとその占い師は、黙ってオレの手を掴んだ。
しばらく虫眼鏡でフムフム言って覗いていた女性の手は冷たく、まるで人形のようだと感じていた瞬間、その顔がガッと上がったかと思うと、その目はギラリとオレを睨み付けた。
少し寒気を感じながら退いたオレに女性は言った。
「大変な人生の転機が訪れる。
それは今夜のようだ。
全てが悪い方向へと流れていく。
手相にはそう出ておる。
お前のツキの悪い運命がまさに今夜始まると。」

オレはまたその類いの結果かと思いながら、占い師を野次ろうとすると占い師は、
「だが一つだけそれを回避する方法がある」と言ってきた。
オレは喉まで出かかった言葉をしまい、それは？と聞くと、占い師は言った。

「お前さんにとっては運命の壁がある。
それはこの街の西の外れ。
それを力一杯拳で殴る。
すると悪い流れを塞き止めるものがなくなり、気はまた流れ出すであろう。」
オレはなんか変な気分になり、ナゼかそのやたら迫力のある力説に飲み込まれ、お礼を言ってしまった。
お金を払い、立ち上がろうとすると、その木製の丸椅子の足がはずれ、オレは思い切り倒れた。
なんなんだ。
打った腰を押さえながら、待ち合わせの場所に行ってみると、まだ彼女は来ていない。
なんだ、いつもは遅れることなんてないのに珍しい。
オレは彼女に電話をした。
ヘンだな。
彼女は電話に出ない。
もう一度掛けてみると、彼女が電話に出たかと思うと、なんだか不機嫌な様子だ。

「何？」
なんだか怒っている。
「何って、まだ来ないの？
どうかした？
待ってるんだけど。」
すると彼女は、
「待っている？
私も待っていたわ。一時間も。
連絡しても出ないし、連絡もしてこなかったのは誰よ！
もう知らない！」
そのまま電話は切れた。
えっ？
オレは慌てて時計を見た。
しかし待ち合わせの時間から大して遅れ、
あっ！
と、止まってる！
街の時計は待ち合わせの時間よりも一時間半程経っていた。
そんな。
電池がこんなタイミングで切れるなんて。
電話の着信も、電車に乗ったときにマナーモードのままにしていて、解除するのを忘れていたせいと、占い師の話に気がいっていたせいで、どうやら気付かなかったようだ。
オレはその時、ハッとした。
あの占い師の言っていたこと。
まさか。
オレはそう思いながら、一応実家に電話をした。
嫌な胸騒ぎがしたからである。
しかしつながった電話の先に、珍しく出た親父から聞かされた言葉は、母の死だった。
オレはあまりのショックに電話を落とした。
なんてことだ。
ハッとして、落としたその電話を拾うと、オレは急いでさっきの占い師のところに走った。
夢かもしれない。
走りながら頬をツネってみたが、現実は変わらなかった。
そして行き着いたそこには占い師の姿は跡形もなかった。
オレはどうしたらいいか考えた。
その時、電話が鳴る。
「モシモシ！」
少し我に帰って出た電話の向こうには、凄いケンマクの怒鳴り声がオレの耳を襲ってきた。

そしてそれが部長の声だとすぐに頭が理解した。
しかし部長はオレが挨拶をする間さえ与えずに怒りを露にしてくる。
その迫力と言ったら、すぐ目の前にいようものなら、ボコボコに殴られている勢いだ。
その怒りの内容をなんとか荒々しい言葉から拾い集めてみると、どうやら以前手を掛けていたプロジェクトの最終決算に重大な見落としがあり、黒字になる筈だったその事業が、一気に赤字。
しかも会社が傾くくらいの損失。
その数字を管理していたのはオレだった。
部長は言うだけ言うと、最後にオレにクビというの二文字トドメをブサリと刺して、電話を切り下ろした。
オレはなんだか浮いてしまいそうに気が遠くなるのをおぼえた。

クラクラと体がよろけ、何かにぶつかる。
すると、今度は凄みのある声が倒れ掛けたオレの頭の上にのし掛かる。
なんとか顔を起こすと、大きな傷がある、ヤクザ映画なんかでよくみる、あまり縁のない、眉間にシワが寄った顔が、
力強い腕がオレを持ち上げて、重く台詞を吐いた。
「アンちゃん。人にぶつかっといてすみませんもなしか？
痛てて。
こりゃ、骨折れてるわっ！
慰謝料もらわんと。」
オレは気が動転した。
パニックになりながら、逃げないといけない事だけは反射的に分かった。
奇声とも言える喚き声をだしながらオレはなんとか男の腕から離れると、必死で走り出した。
後ろからは待てぇーコラっー！と追っ手が後をつけてくるのを知らせる。
後ろなど振り向くことさえせずに、オレは走った。
気がつくと、西の方向だった。
オレは占い師の言っていたことを思い出した。
壁。
西の外れの壁。
オレは必死でそれを探した。
壁、かべ、カベ、
しかしこの街の西の外れには壁なんてない。
それでもオレは探した。
しかし、そんな逃げ方にはやはり無理があり、オレは男と鉢合わせになってしまった。
オレは仕方なくヤケになり、男の胸へと渾身の拳をぶつけた、その瞬間。
ボキッ！
身体中に痛みといやな音が走った。

男は、ニヤリッと笑うと、オレに、
「いい度胸だ！」
と、お返しの拳を、
後は憶えていない。

気づいたら病院らしかった。
そしてナゼかオレを覗き込む彼女と母親、そして部長まで。
オレは体を起こしてどうしたのか聞こうとすると、痛みがあちこち、特に手首、いや手の平辺りからヤタラに感じ、ベッドへ伏せ直した。
それを見た全員が、声を揃えてまだ安静だと訴えてきた。
そして彼女がオレに、かなり心配していたことや、あの晩は大人気ないことで怒っていたこと、丁度仕事のイライラであたっていたこと、そして次に死んだ筈の母が、この頃よく掛かってくるオレオレ詐欺退治を、丁度父親に頼んでいて、死んだことが嘘であったこと。
部長が申し訳なさそうに、例のプロジェクトのミスは、上の方が勘違いしていただけだったことなどを謝ってきて、悪夢が終わったことを知った。
そしてついでに、オレを追い回した男が、たまたま通り掛かった警官に捕まり、オレに慰謝料を払うハメになったことも聞き、ツキが、流れが戻ったことを感じた。
そしてその原因が、

オレはまじまじと包帯が取れた手を、手の平を見た。
オレはあの晩に男を殴った。
あの壁のような胸板を。
普段ケンカなどしないオレの手首の骨は、運動不足や、はたまたカルシウム不足により、その瞬間バラバラに弾けたそうだ。
そしてそれを修復する手術で医者の先生は手の平を手首辺りまで切った。
そして、その先生の丁寧な性格から、傷を目立たなくするために、手のシワ沿いにメスは入れられ、そしてそのお陰で手相が、
変わったのであった。

それからオレは占いには行かなくなった。
実を言うと、オレは占いに行くことで、野次りながら日頃のストレスを発散していた気が、今思えばするのだ。
そして今回はそのバチが当たったんじゃないか？
そう、なんだか信じるなんて考えたこともなかった占いを認めざるをえなくなることが、きっと怖くなったのかも知れない。
しかしこの変わってしまった手相にどんな未来が示してあるのか。
気にならないと言ったら嘘になるが。

その整形外科の医者は、ロッカールームで白衣を脱いだ。
そして着替えをしたその女医は、水晶や虫眼鏡などが入ったカバンを片手に夜の街へと消えて行ったのだった。

おしまい。

いかがでしたか？
今日のオススメのカクテルの味は。
またのご来店、心をよりお待ち申し上げております。では。